



## 落ち葉敷き乾燥防止

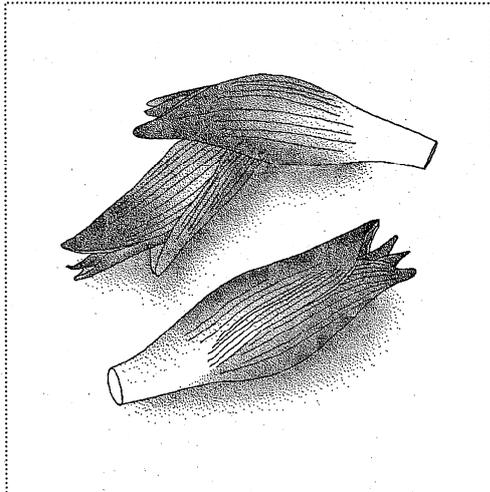
——**鮫島 國親**

ミョウガは食用とする部位によって、花ミョウガ（花蕾を食べる）とミョウガタケ（若い茎を食べる）に分かれます。今回は独特の風味と鮮やかな紅色が好まれ、麺類の薬味や天ぷら、和え物などに幅広く利用される花ミョウガの露地栽培を紹介します。

品種の分化は進んでおらず、花蕾の発生時期によって夏ミョウガ（6－9月）、秋ミョウガ（8－10月）と呼ばれています。花ミョウガ栽培は主に夏ミョウガが用いられます。

生育適温は21－23度で、30度以上では生育が抑制されます。半日陰を好み、乾燥を嫌います。地上部は霜にあうと枯れますが、地下茎はかなりの低温に耐えます。ほ場は夏涼しく風通しが良く、晩霜のおそれの少ない、排水の良い場所を選びましょう。

本ぼには1平方メートル当たり苦土石灰100グラム、堆肥2キロ、化学肥料100グラム、（2年目以降は50グラム三要素15%の場合）を目安として施します。植え付けは間引きした地下茎を長さ10－15センチに切って行います。秋植え（11月中旬－12月中旬）と春植え（2－3月）がありますが、



暖地では秋植えが良いです。栽植密度はうね幅60－80センチ、株間15センチ、1－2条植えとし、二うねごとに40センチの溝を設けます。植え付け深さは5センチです。追肥は本葉が7枚のころ化学肥料を20グラム程度施します。落ち葉の敷き込みは12月及び6月ごろ（本葉六枚のころ）に行います。ほ場の乾燥防止に役立ち、花蕾の肥大や色つきを良くします。

植え付け後4－5年経過したら、冬期に畑を80－120センチと40センチに区切り、40センチの部分の地下茎を掘りあげ、地下茎の更新を行います。地上茎の間引きは本葉6枚のころに行います。最終的に1平方メートル当たり60－70本になるようにします。本葉7－8枚のころに花

芽ができ、12－13枚のころから花蕾が地上に出てきます。花蕾が十分発育して、しかも開花前が収穫の適期です。水やりをこまめに行えばプランター栽培もできます。

（**鹿児島県農業開発総合センター副所長**）

平成19年12月13日（木）／南日本新聞